新しい薩摩焼デザインの開発

企画支援部　　○山田淳人，藤田純一
研究主幹(食品・化学担当)　中村寿一

１．　はじめに

薩摩焼は，国の伝統的工芸品の指定を受けて以降，消費の低迷や，国内外の商品流入で生産の減少や後継者不足など，厳しい事業環境に置かれている。要因の１つに，薩摩焼には，美術工芸品的な商品が多く見られるため，窯元においては，消費者ニーズを意識した新しい試みが行われにくく，消費者の購買意欲を刺激しない点が挙げられる。そこで，消費者ニーズを意識し，これまで培った伝統工芸技術や他業種とのコラボレーションにより，新しい薩摩焼を企業と開発した。

２．　白薩摩における絵柄の多様化

白薩摩の絵付は，古来より花鳥風月や秋草など伝統的な絵柄が書かれており，現在では，伝統的な手書きの技法により，その高い技術力が保たれている。最初の取組として，白薩摩の上絵技術を持って，消費者ニーズに合った商品を開発することにした。

はじめに，窯元と共通認識を持つため，イメージボード（図１）を作成した。これは，ターゲットとして想定している日本の若者文化に興味を持つ外国人観光客や洋食器に対して根強い憧れを持つ首都圏主婦層が嗜好するであろう画像をスクラップしたものである。イメージボードを俯瞰して，随所に女性らしさを象徴するレース柄が見受けられた。レース柄は，非常に細かく繊細な糸を編み込んだ普遍的な柄であるが，細かく繊細な点は白薩摩の上絵と共通し，その再現も可能であることから，レース柄を既存の丸皿やビアカップの上絵に展開することにした。

色やレース柄の配置に関しては，シール用紙にレース柄をプリントし，素地に貼って検討した（図２）。割り付け文様の技法を用いることで，提案したレース柄より細かい図柄でレース柄を絵付けできた。製作風景を図３に示す。出来上がった商品（図４，５）は，首都圏で行われたイベントにて展示販売，モニタリングを行った。モニタリングでは，手書きであることの驚きと，買い求めやすい価格であるなど概ね好評で，引き続き百貨店の催事などでも販売された（図６）。また，特産品協会の工芸品ポスターにも採用され，初回生産分は完売となった。現在，アイテム数を増やし，定番商品として販売されている。

図１　イメージボード

図２　シール用紙による検討

図３　製作風景

図４　レース柄皿

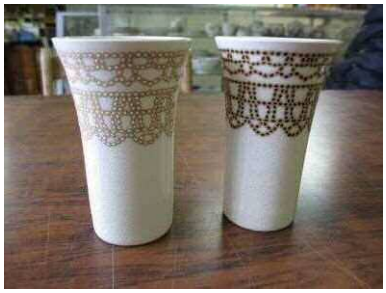
図５　レース柄ビアグラス

図６　催事風景

３．　他業種とのコラボレーションによる薩摩焼の提案

国の伝統的工芸品に指定されている川辺仏壇の製造技術を持つグループとコラボレーションし，外国人観光客や国内高級志向の観光客をもてなす旅館や和風茶房等をターゲットとし，茶菓子やスイーツを提供するための商品を開発した。

外装には，岡持ち風の外箱（図７）に，漆仕上げと蒔絵を施し，和を演出した。外箱及びお重部分の検討には，レース柄同様にシール用紙等にプリントアウトし，検討した。お重部分には，これまでにない，割り付け文様などを大胆にあしらった案も提案したが，結果として薩摩焼本来の古典柄である秋草文様を描くことになった（図８～11)。出来上がった製品は，モニタリング等を行い（図12)，「薩摩の味覚箱」と名付け，現在販売を行っている。

図７　仏壇技術による外箱

図８　蒔絵柄案の一部

図９　上絵柄案の一部

図10　検討風景

図11　完成した商品

図12　モニタリングの様子

４．　結果

消費者ニーズからターゲットを絞り込み，モチーフとなる絵柄について，シール用紙による速やかで，客観的な検討を行うことにより，より魅力的な商品作りが可能となる。自由度が高い反面，白薩摩の持つ華麗さや優美さのイメージを踏まえた絵柄でないとその魅力をアピール出来ないことがわかった。開発した２つの商品は，新特産品コンクール等に出品するなどし，好評を得て，首都圏催事等で販売が行われている。

５．　おわりに

シール用紙での検討結果よりも高いクオリティで，商品を完成させる伝統技術の凄さを痛感した研究であった。今後も，鹿児島の伝統技術を活かした新しいものづくりに取り組んでいきたい。

残念ながら，黒薩摩焼の窯元との新しいデザイン開発の試みは，提案が作風と合わないなどの理由から実現出来なかったが，今後も黒薩摩焼の窯元との新しい試みは模索していきたい。

この研究においては，紹介した商品開発的な研究の他に，薩摩焼共同組合が主催する行事等における試作品提供や企画段階でのソフト面でのサポートなど多岐にわたる支援を行った。今後も薩摩焼製造に係る企画や技術的課題に対し積極的に支援していきたい。

試作に協力いただいた渓山窯南州工房，絵付工房秋月窯，川辺伝承七職会に感謝の意を表します。